

の学術の裡では不問に付される。小侯ラボー日登美は、トリノの聖骸布の真贋問題を検討する。炭素同位体による年代測定はこの聖遺物の虚構性を解明した。だがAuthenticity探求は、信仰結束の任務に奉仕し、「真実」を物証の彼方に奉獻する儀礼が、奇跡の権威を保証する。今やノーベル科学賞こそが現代の聖遺物認定証書へと変貌を遂げている。

魚の心など読めぬ、とは誰が決めたのか——こう莊子は難詰した。動物行動学者、佐藤駿は、魚に心はないとの判定根拠と、その立証の道具立ての有効性を吟味する。そこには、人間を動物から峻別する聖書の伝統に根ざした、西欧近代自然科学の暗黙の前提が露呈する。

生物進化学者、三中信宏はグルーピング作業と系統樹モデルによる溯及的推論とに、相補的な発見術を探る。社会学者のP.ブルデューは「分類者は分類方法により分類される」と喝破したが、以下はそれに肖った評者の質問：①渡邊慧の「醜いアヒルの子」定理は類似性認定には特定の価値判断が不可避なことを数学的に立証したが、その有効性は？ ②起源を異にする発生過程から類似した機能が進化上で収斂する事例は、如何？ ③そこで変形菌—粘菌はどう系統分類するのが適切か？ ④粘菌学者・南方熊楠はモノとココロの交差点にコトが生ずる、と観察したか、彼の曼荼羅思考と系統樹模型との整合性は？

(本件拙見は次回に)

拠を糾弾した所謂 Science Warsからも30年が経過した。評者は1980年代末のいわゆる「駒場西部劇」、東京大学駒場キャンパスで中沢新一の任用が教授会で否決され、西部邁らの辞職を招いた事件が、夙にこのソーカル事件の予行演習だったとの感触を新たにした。科学的知識の比喩的援用を自然科学者たちが「知の欺瞞」と見て峻拒した図式が両事件で酷似しているからだ。

ここに、自然科学の世界での「事実」認定が人文学とは相容れない、との主張が頭を擡げる。この背後には複雑な事情が絡む。日本語の「科学」はドイツ流の Fachwissenschaften の移入。東京大学には欧米には不在の工学部が設けられたが、第二次大戦下で「科学技術」が立法化され、さらには「科学技術基本法」(1995)からは人文諸学が除外される。

これはhuman sciencesや、Kulturwissenschaften を含む欧米の「科学」観とは制度的にも乖離する。さらに英米語圏の分析哲学展開の背景にはナチスによる迫害を逃れたユダヤ系学究のドイツ観念哲学忌避が絡まる。以上の前提に立ち、本書の幾つかの論点に対して「欺瞞的」論評を加えたい。

歴史家J.F.ショープは、西欧歴史学は自らの規範を他者に押し付けはしないと主張する。だが西欧学会による術語選択や論述形式の覇権は否定できず、欧米基準の学術的度量衡の貫徹が学知の globalization の基礎をなしたのではなかったか。

学術の前提条件は、当該

連載
258

学術の基礎を問い直す(上)「事実認定」の渋滞と紛糾

小侯ラボー日登美編著『「事実」の交差点——科学的対話が生まれる文脈を探して』
(ナカニシヤ出版)を読む

稲賀繁美
国際日本文化研究センター／
総合研究大学院大学 名誉教授

四つ辻の交差点では信号を遵守しなければ容易に衝突事故が発生する。信号待ちを解消する筈の rotary (米) では、運転手はまま出口を間違え、round about (英) は、侵入車両の総量が飽和すれば、却って収拾不可能な交通渋滞を招く。

多領域にわたる学術の交差点でも、同様の混乱は避けられない。編者は条坊制の京都市街に点在する不規則に振れた「ぐいち」を比喩に、「事実」認識の交差点に潜む混乱に注目する。

専門分野を跨ぎ、文理の隔てを超えて、多分野の専門研究者が議論を交差させる合流点 Treffpunkt。通常の書店では分類不能となりかねない編著だが、そこに京都大学白眉センターならではの成果が集約される。

1963年の『サイエンス』誌には、こんな危惧が表明されていた。曰く科学探求の成果は用途不明の煉瓦の集積と化し、もはや瓦礫とも建築ともつかぬ、収拾不能の惨状を呈している、と。

それから干支が一巡した今日、問題は更に錯綜している。学知が植民地主義の手先だったとの非難は、E. W. サイド『オリエンタリズム』(1978)の基調だが、それは人権侵害への糾弾と癒着し、匿名で集団的に「被害者」を僭称あるいは代行する脱法的横領により利鞘を稼ぐ、S N S 濫用の「キャンセル・カルチャー」に、権力篡奪への格好の捌け口を提供するに至っている。

アラン・ソーカルがフランス派脱近代派思想の無根